

奥出雲町立小学校再編方針

平成31（2019）年3月

奥出雲町教育委員会

目 次

I 方針策定に至る経過	1
1 奥出雲町の概要.....	1
2 奥出雲町学校再編基本計画の策定.....	1
3 町全体での学校の概況.....	2
II 小学校の現状	4
1 児童数および学級数の状況.....	4
2 町内小学校別の児童数の推計.....	4
3 将来の児童数の推計.....	5
4 保護者アンケートの結果について.....	6
III 方針の必要性	7
1 方針の必要性について.....	7
IV 学校再編をめぐる背景	8
1 学級編成基準.....	8
2 少子化にかかわる国の対応.....	8
3 町内の学校の課題について.....	9
4 複式学級における学習指導について.....	12
V 学校再編の目的	14
1 奥出雲町の目指す学校像.....	14
2 奥出雲町を目指す学校教育.....	14
3 再編による教育上の効果.....	14
4 再編にあたり配慮すべき事項.....	15
VI 再編実施方針	16
1 再編の対象とする学校.....	16
2 再編の具体的方針.....	16
3 具体的方針により再編した場合の児童数推計.....	17

4	学校再編についての基本的手順.....	18
(1)	地区別協議会、再編準備委員会の設置.....	18
(2)	保護者の意向の尊重について.....	18
(3)	再編に向けてのスケジュール.....	18
(4)	再編校の名称、校章、制服、体操服等について.....	18
5	現在の小学校における今後の児童数及び学級編成の見込み等.....	19
(1)	布勢小学校.....	20
(2)	三成小学校.....	21
(3)	高尾小学校.....	22
(4)	亀嵩小学校.....	23
(5)	阿井小学校.....	24
(6)	三沢小学校.....	25
(7)	鳥上小学校.....	26
(8)	横田小学校.....	27
(9)	八川小学校.....	28
(10)	馬木小学校.....	29
VII	中学校について.....	30
1	各中学校の生徒数・学級数の推計.....	30
(1)	仁多中学校.....	30
(2)	横田中学校.....	30
2	中学校の再編について.....	31

I 方針策定に至る経過

1 奥出雲町の概要

2005年3月に旧仁多町と旧横田町が合併し、4986世帯、人口16274人（男7819人、女8455人）、面積約368km²の奥出雲町が誕生しました。

それから13年が経過した、2018年4月1日現在では、人口12787人（男6146人、女6641人）、4743世帯となっています。

※ 平成31年度中に予定されている元号変更を踏まえ、以後特別な場合を除き、年号は西暦表示とします。

2 奥出雲町学校再編基本計画の策定

2005年の合併時の児童・生徒数は、約1400名でしたが、その後、全国的な少子高齢化の流れは、奥出雲町においても例外ではなく、少子化、校舎の老朽化等の問題から、2007年9月に、全町的な学校適正規模適正配置について、肥後功一島根大学教授を委員長とする奥出雲町学校再編基本計画検討委員会に諮問しました。

検討委員会からは、2009年1月に、

「学校の適正配置は、地域関係者、保護者の意見を尊重しながら、学校・地域・行政が連携し、一体となって進めていく必要がある。このために、学校別に個々の事例ごとに具体的な方策を検討し、今後の学校のあり方や、統廃合時におけるその跡地利用も含めて、関係者等の理解を得て統廃合の対象校の再配置について、その具現化に向けて実施計画を策定し進めていくことが必要である。」

との答申がなされました。

この答申を受け、2009年8月には、教育委員会から町長に対し、

「児童が健やかに育まれる教育環境を維持するため、全校児童数15名以下の極小規模校は、早急に学校再編をする必要がある。また、複式学級のある小規模校についても、今後の児童数の減少や社会情勢の変化などにより、望ましい教育環境を確保するために、学校の再編をする必要がある。」

との報告をしています。

3 町全体の学校の概況

2005年の合併時、2中学校、11小学校だった学校数は、2016年4月、高田小学校と亀嵩小学校が統合し、現在、2中学校、10小学校となっています。

児童数については、2006年度以降も少子化の進行を受け、2018年度現在、以下のようになっています。

<奥出雲町の児童・生徒数の推移>

奥出雲町		2006年度		2018年度	
小学校	児童数	845		児童数	524
	学校数	11		学校数	10
	学級数	66		学級数	60
	児童/学級	12.8		児童/学級	8.7
中学校	生徒数	486		生徒数	284
	学校数	2		学校数	2
	学級数	18		学級数	17
	生徒/学級	27.0		生徒/学級	16.7

2006年度、845名を数えた小学校在学児童は、2018年度には、524名に減少しており、2006年度1学級あたり12.8人だった児童は、8.7人に減少しています。学校別の児童数、学級の詳細は後述します。2006年度に比べ、2018年度は複式学級、特別支援学級が増加しており、単純計算はできませんが、単式通常学級の1学級あたりの児童数は、確実に減少しています。

参考資料として、県内同規模の町の状況を記載します。

邑南町		2006年度		2018年度	
小学校	児童数	554	児童数	484	
	学校数	9	学校数	8	
	学級数	48	学級数	43	
	児童/学級	11.5	児童/学級	11.3	
中学校	生徒数	321	生徒数	228	
	学校数	3	学校数	3	
	学級数	14	学級数	14	
	生徒/学級	22.9	児童/学級	16.3	

隠岐の島町		2006年度		2018年度	
小学校	児童数	830	児童数	635	
	学校数	13	学校数	7	
	学級数	74	学級数	51	
	児童/学級	11.2	児童/学級	12.5	
中学校	生徒数	504	生徒数	346	
	学校数	6	学校数	4	
	学級数	27	学級数	22	
	生徒/学級	18.7	児童/学級	15.7	

※ 邑南町、隠岐の島町については、当該年度の教職員名簿記載の数値を使用しています。

II 小学校の現状

1 児童数および学級数の状況

< 2006年度の町内小・中学校の児童数・学級数等の状況 >

	学校名	児童数	学級数
小 学 校	布勢小学校	86	8 (単6・特2)
	三成小学校	147	8 (単6・特2)
	高尾小学校	17	3 (複3)
	亀嵩小学校	49	7 (単6・特1)
	高田小学校	23	3 (複3)
	阿井小学校	100	7 (単6・特1)
	三沢小学校	32	4 (単2・複2)
	鳥上小学校	50	6 (単2・複2・特2)
	横田小学校	169	8 (単6・特2)
	八川小学校	86	6 (単6)
	馬木小学校	86	6 (単6)
	合計	845	66 (単46・複10・特10)
中 学 校	仁多中学校	259	9 (通8・特1)
	横田中学校	227	9 (通7・特2)
	合計	486	18 (単15・特3)

< 2018年度の町内小・中学校の児童数・学級数等の状況 >

	学校名	児童数	学級数
小 学 校	布勢小学校	61	8 (単6・特2)
	三成小学校	91	8 (単6・特2)
	高尾小学校	9	3 (複3)
	亀嵩小学校	32	5 (単2・複2・特1)
	高田小学校		
	阿井小学校	61	7 (単4・複1・特2)
	三沢小学校	22	5 (単2・複2・特1)
	鳥上小学校	33	4 (複3・特1)
	横田小学校	112	8 (単6・特2)
	八川小学校	47	5 (単2・複2・特1)
	馬木小学校	56	7 (単6・特1)
	合計	524	60 (単34・複13・特13)
中 学 校	仁多中学校	152	9 (通6・特3)
	横田中学校	132	8 (通6・特2)
	合計	284	17 (通12・特5)

※通：通常学級、単：単式学級、複：複式学級、特：特別支援学級

2 町内小学校別の児童数の推計

学校名	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	2028年度
布勢小	58	60	59	56	54	48	47	44	42	40
三成小	95	94	89	93	92	101	100	100	100	94
高尾小	9	7	7	6	5	4	3	2	1	0
亀嵩小	36	35	42	43	38	40	37	36	29	28
阿井小	63	64	58	59	54	50	54	50	50	48
三沢小	21	22	23	23	24	19	18	19	15	16
鳥上小	24	24	19	17	18	13	14	12	12	13
横田小	101	90	94	81	91	89	88	86	80	81
八川小	50	55	52	50	48	40	35	30	28	28
馬木小	54	48	44	43	38	37	33	34	34	31

※2018.4.1のデータによる数値のため、実際の児童数と異なる場合があります。

※社会動態、自然減、区域外就学は考慮していません。

※2025年以降は、「H30教職員定数算定資料」による数値です。

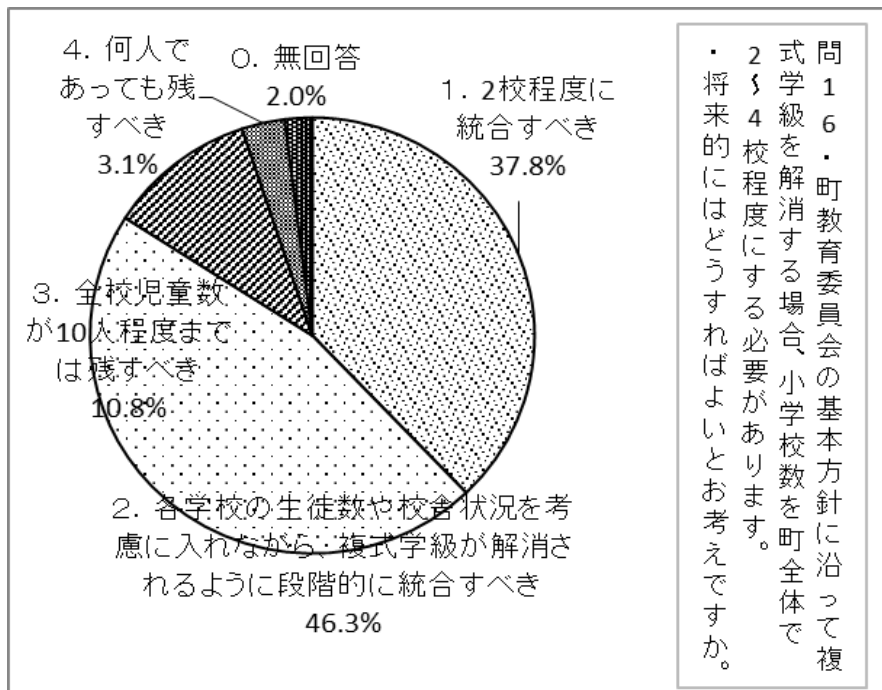
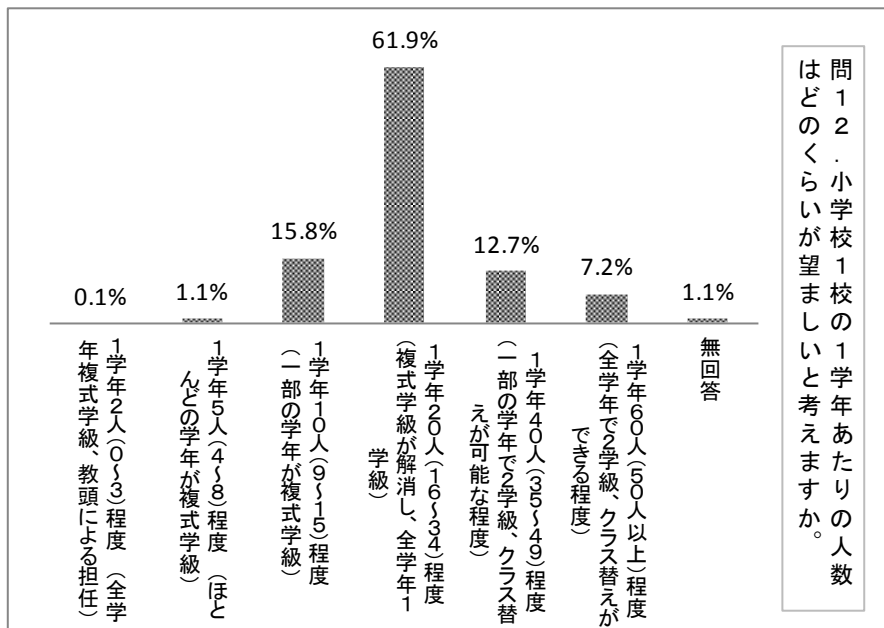
3 将来の児童数推計

また、奥出雲町人口ビジョン（H27.10策定）によれば、2040年町内の児童数は、町全体で200人を切ると想定されます。仁多中学校区、横田中学校区それぞれ100人前後の児童数となり、現在の学校数を維持すれば、複式学級のある学校の増加等の課題が予想されます。

4 保護者アンケートの結果について

奥出雲町教育委員会では、2017年10月から12月にかけて、町内の0歳から中学生までの保護者を対象に、「望ましい教育環境を確保するための学校再編に関する保護者アンケート」を実施しました。小学校1校の1学年あたりの望ましい人数と将来的な学校数のあり方についてのアンケート結果は以下の通りです。

全体（保護者アンケート結果）



Ⅲ 方針の必要性

1 方針の必要性について

以下の点から、奥出雲町立小学校の再編についての方針の策定が必要であると考えます。

(1) 2009年、奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申、およびこれを受け同年8月の教育委員会から町長への報告

「児童が健やかに育まれる教育環境を維持するため、全校児童数15名以下の極小規模校は、早急に学校再編をする必要がある。また、複式学級のある小規模校についても、今後の児童数の減少や社会情勢の変化などにより、望ましい教育環境を確保するために、学校の再編をする必要がある。」

と表明して以降、教育委員会として学校再編に係る具体的な方針を示していないこと。

(2) 合併後の児童数の減少及び今後の人口推計による児童数の減少について傾向は変わらず、今後の児童数のさらなる減少に対応する方針を示す必要があること。

(3) 保護者アンケートの結果からも、児童数の減少に対する懸念、減少に対応した学校再編を望む声が多く、今後の教育行政に関する方針を示す必要があること。

IV 学校再編をめぐる背景

1 学級編成基準

適正な学校規模の条件は、「学級数が、小学校及び中学校にあってはおおむね十二学級から十八学級まで」通学距離については、「小学校にあってはおおむね四キロメートル以内、中学校及び義務教育学校にあってはおおむね六キロメートル以内であること」と規定されています。（義務教育諸学校施設費国庫負担法施行令）

また、1学級あたりの児童・生徒数については、「単式学級を編成する基準は、小学校にあっては、1年生は児童数35人、それ以外の学年は児童数40人。中学校にあっては全学年生徒数40人」とされています。（公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の基準に関する法律）

島根県においては、小学校1・2年の1学級の児童数が31人以上の学校については30人学級編成、小学校3年生～中学校3年生については35人学級編成が可能な少人数学級編成のための予算措置がなされています。

また、複式学級を編成する基準は、小学校にあっては1年生を含む場合は、8人、1年生を含まない場合は16人となっています。島根県の場合、中学校では、生徒数の多寡にかかわらず複式学級は編成しないことになっています。

<資料 島根県における学級編成基準>

	島根県の小学校		島根県の中学校	
	学年	人/学級	学年	人/学級
単式学級	1年	30	1年	35
	2年	30	2年	35
	3年	35	3年	35
	4年	35		
	5年	35		
	6年	35		
学複式	1・2年	8		
	3・4年	16		
	5・6年	16		

なお、国基準の適正学校規模は全国的な標準規模の学校についてのものであり、本町において、標準となる規模を満たしている学校はありません。

また、県の単式学級に関する基準についても、本町においては小学校の全ての学級で35人を下回る状況であり、35人学級の適用を受けている学校はありません。

2 少子化にかかわる国の対応

2008年をピークに、全国的に人口減少局面に入っている人口動態の状況を踏まえ、文部科学省から、2015年1月に「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて」が示されました。

この手引の中で、

「学校では、単に教科等の知識や技能を習得させるだけでなく、児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて思

考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付けさせることが重要になります。そうした教育を十全に行うためには、一定の規模の児童生徒集団が確保されていることや、経験年数、専門性、男女比等についてバランスのとれた教職員集団が配置されていることが望ましいものと考えられます。このようなことから、一定の学校規模を確保することが重要になります。(P3)」

と、適正な学校規模の確保の重要性が求められていますが、同時に、

「本手引の内容を機械的に適用することは適当ではなく、あくまでも各市町村における主体的な検討の参考資料として利用することが望まれます。(P5)」

と、学校の設置者が学校規模の適正化、学校統合の適否や小規模校を存置する場合の支援等、主体的な検討を行うことを求めています。

3 町内の学校の課題について

本方針においては、「奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申」をふまえ、学校規模については、複式学級のある学校を「小規模校」とし、全校児童数が15名以下の小学校を「極小規模校」とします。また、6学年全てが単式で編成されている学校を通常規模校とします。

2018年度、町内の小学校は、

通常規模校 4 布勢小学校、三成小学校、横田小学校、馬木小学校

小規模校 5 亀嵩小学校、阿井小学校、三沢小学校 鳥上小学校、八川小学校

極小規模校 1 高尾小学校

という状況です。

布勢、阿井、馬木の3小学校については、学年によって8人以下となるなど、在籍数の増減があるため、学年度によって、単式、複式を繰り返す学級があります。

このため、今後、通常規模校と小規模校を繰り返す可能性があります。

このような状況についての課題は、すでに「奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申」及び文部科学省の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」において示されています。

<「奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申」>から

○小規模校の抱える現状と課題

人間は人の中で育つという。人間関係が希薄化し、社会性の低下が指摘されている現在、子ども達の社会性や豊かな人間性を育むには、ある程度の集団の中で学習・生活ができる環境を整えなくてはならない。特に、グローバル化したこれからの世の中を生き抜いていく子ども達に、日常生活の中で人と人とのふれ合いの場を保障し、多様な価値観を学ばせ、多様化した社会に対応する能力、コミュニケーション能力を育くむ必要がある。

しかし、奥出雲町内の小学校は（中略）、日常生活の中で人との交わりが限られていくと予想される。異年齢のつながりは大切だが、学校教育が年齢別集団を基本としている点から、学校生活の大部分は学級で占められ、同学年の子ども同士遊びや学習の中で自然に学ぶのが基本である。少人数学級、とりわけ「一人学級」「一人学年」といった極小規模の学校では、男女比率の偏りや異性のいない学級が生じ、心身の発達に望ましい教育環境を保障することができない。このような状況を学年を越えての全校活動や異学年交流や他校との交流学习や合同学習などの場を設定する工夫を試みているが、社会性の育成という点では、十分とはいえない。

一方、教科指導については、個人指導が徹底する利点はあるものの、多様な意見を述べたり、討論することによって思考の拡大、多様な価値観を育むためには、限られた人数による学習では限界がある。また、幼稚園から小学校卒業までクラス替えができないなど固定化された人間関係の中では、良い意味での競争心や社会性が育ちにくくなると考える。

○複式学級について

児童数が少なく、一つの学年だけで学級を編制できない場合、国の学級編制基準では、2学年（引き続く二つの学年で16名以下）を合わせて複式学級を編制している。

知識・知的面での指導は、複式学級ならではの良さもあるが、マイナス面も大きい。例えば、異学年が同一教材で学習する場合、カリキュラムをA年度・B年度で編制する。下学年が上学年の内容を学習する場合は、内容の理解度が大きな問題となる。また、複式学級で学んだ児童が単式学級の学校へ転校した場合には、年度により学習していない内容が生じたり、転入生の受け入れにも同様な現象が発生する。異学年が違う内容を学習する算数の場合は、一人の教師が一単位時間で2学年を交互に直接指導するいわゆる「わたり指導」となる。

複式学級が増加すると教職員の配置数も減り、養護教諭、事務職員、美術・音楽・体育などを専攻している教師の確保にも困難をきたし、教師の勤務も通常の勤務以上の負担をもたらすことになる。また、全校児童数が15名以下になると、教員の配置基準により、教員数がさらに減少し、教頭が学級担任をするか、教頭無配置校になる。このことは、学校の管理運営が厳しくなり、ひいては教育水準の低下にもつながる恐れがある。(P2-P3)

<公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引>から

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（以下「文科手引」）においては、

「学級数が少ないことによる学校運営上の課題」として、

- ①クラス替えが全部又は一部の学年でできない
- ②クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない
- ③加配なしには、習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい (P6)

等の課題が示されていますが、これは、1学年複数学級を念頭に置いたものであり、本町の実態にはそぐわない視点と考えます。

しかしながら、

- ①一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい
- ②意見や感想を発表できる機会が多くなる
- ③様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる
- ④複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる
- ⑤運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える
- ⑥教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ICT機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である
- ⑦異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことが

できる (P34)

等のメリットは、本町の学校の現状に当てはまるものと考えます。

また、複式学級については、以下のような課題も指摘されています。

- ①教員に特別な指導技術が求められる
- ②複数学年分や複数教科分の教材研究・指導準備を行うこととなるため、教員の負担が大きい
- ③単式学級の場合と異なる指導順となる場合、単式学級の学校への転出時等に未習事項が生じるおそれがある
- ④実験・観察など長時間の直接指導が必要となる活動に制約が生じる
- ⑤兄弟姉妹が同じ学級になり、指導上の制約を生ずる可能性がある (P7)

教職員数の減少による課題は、「奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申」でも指摘されているとおりですが、学校運営上の課題として、

- ①経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置やそれらを生かした指導の充実が困難となる
- ②教員個人の力量への依存度が高まり、教育活動が人事異動に過度に左右されたり、教員数が毎年変動することにより、学校経営が不安定になったりする可能性がある
- ③児童生徒の良さが多面的に評価されにくくなる可能性がある、多様な価値観に触れさせることが困難となる (P9)

などの点が指摘されています。

さらに、学校運営上の課題が児童生徒に与える影響として、

- ①集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につけにくい
- ②児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい
- ③協働的な学びの実現が困難となる
- ④教員それぞれの専門性を生かした教育を受けられない可能性がある
- ⑤切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい (P9)

などの点が指摘されており、これらの課題は、本町の小規模校及び極小規模校すべてに該当することと考えます。

なお、学級の在籍数により、単式学級と複式学級を繰り返す学年については、二つの学年の学習内容を取り混ぜた「同単元同内容同程度 (A・B年度方式)」の学習指導はできません。このため、算数以外の教科 (例えば、国語、社会、理科) においても学年別指導「わたり」による授業を行うこととなります。(※ 複式の指導法については、詳細を後述しています)

単複を繰り返す学級においては、学年別指導を受けることにより以下のようなメリット、デメリットの発生が予想されます。

○複式年度の学級で学んだ児童が単式学級の学校へ転校する場合にも学習していない内容が生じる心配はなくなります。

○教師が別の学年を指導している間、児童が相互に学び合う活動を充実させることができます。

▽見学・実験・観察を含め、教科にかかわる校外学習など、長時間の直接指導が必要となる活動に制約が生じる場合が多くなります。

▽別の学年を指導している間、教員が一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握したり、個別指導を含めたきめ細かな指導をしたりすることは難しくなります。

▽毎時間、複数学年分の教材研究・指導準備を行うこととなるため、特別な指導技術を含め教員の負担が大きくなります。

4 複式学級における学習指導について

島根県における複式学級の学習指導では、従来、「同単元同内容同程度（A・B年度方式）」が行われてきました。これは、1人の児童が2学年分の教科書を持ち、教員は、児童の実態等に合わせて2年間で2学年分の学習指導を行うというものです。学習内容の順序を入れ替えることが難しい算数を除いて、国語、社会、理科等で行われています。

算数については、複式学級の中の2つの学年を1人の教員が交互に移動しながら両学年を同時に指導しています。この指導法では、教員が直接指導している学年以外の学年は、間接指導(自習)をしています。このような複式学級での学年別指導方法を通称して「わたり」（以下 学年別指導）と言います。

また、人数の関係で、単式学級・複式学級を繰り返す学級においては、単学年度に学年別の順序によらない指導「同単元同内容同程度（A・B年度方式）」（以下A・B年度方式）を行うことができないため、複式学級の年度においても国語・社会・理科を含め、他の教科においても学年別指導をすることになります。

※学習指導要領（総則 第2 5）

学校において2以上の学年の児童で編成する学級について特に必要がある場合には、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。

児童数と学級編成及び学習指導についての補足説明です。

A～G年度の期間、下記のような人数・学級構成の学校を想定します。

	A年度		B年度		C年度		D年度		E年度		F年度		G年度	
1年	④	単	3	複	4	複	3	複	0	単	4	単	5	単
2年	9	単	④	複	3	複	4	複	3	単	0	単	4	単
3年	9	複	9	単	④	単	3	複	4	複	3	複	0	単
4年	7		9	単	9	単	④	複	3		複	4	複	3
5年	11	単	7	単	9	複	9	単	④	複	3	複	4	複
6年	8	単	11	単	7		9	単	9		複		④	
	5		5		4		4		3		3		4	

B年度の3名の入学生、及びC年度の4名の入学生については、6年間複式学級の編成になりますが、学習指導については、すべて、「A年度・B年度方式」によるわけではありません。

B年度の3名の入学生を例にします。

このB年度の1年前、A年度の入学生4名は、A年度に単式学級で1年生の学習を行っています。このため、翌B年度は、2年生の学習を行うこととなります。この年度複式学級のため、入学した3名は2年生の教科書を受け取ることは可能ですが、2

年生4名の学習状況から、1年生としての内容を学習する「学年別指導」を受けることとなります。

翌C年度も、同様の理由により、学年別指導を受けることとなりますので、この学年については、卒業まで複式学級であっても学年別指導を受けると予想されます。

また、E年度は、入学生がいない年度になり、低学年は、実質単式学級になります。F年度の入学生はA・B年度方式をとることができないため、この年度以降、上記の例と同様の事態が発生します。

以上のようにその年度複式学級であっても、前年度の在籍状況により、学習指導の在り方が変わってきます。ここで例に挙げた学校のように、一見複式学級であっても、上下の学年の関係から、「学年別指導」による学習指導を受ける学年も出てきます。

一般的に「複式学級」というと、「A・B年度方式」の学習をイメージするのですが、これは、実質的に複数年度にわたり複数の学級が複式学級である場合の学習(指導法)ということになります。

V 学校再編の目的

1 奥出雲町の目指す学校像

(1) 小学校の適正規模について、文部科学省の手引きでは1学年2学級以上(12学級以上)が望ましいとしていますが、奥出雲町全体の児童数の状況、さらなる少子化や校区の広さ、保護者アンケートの結果を考慮しつつ、極小規模校、複式学級、及び小規模校の課題に対応するため、1学年20人以上の学校を適正規模校とします。

(2) 適正規模校を基本とし、多様な考えに触れるなど活力ある学習活動や集団活動のできる学校。

(3) 適正規模校になることにより、教職員の適切な配置のもと、充実した学習指導や個への対応が行われる学校。

(4) 安全安心な学校環境及び充実した設備の中で多様な学習活動が展開できる学校

2 奥出雲町を目指す学校教育

奥出雲町では、平成30年度より、教育委員会の組織を改編し、教育魅力課、結婚・子育て応援課の2課体制としました。また、新たに町教育魅力化協議会を設置するなど、教育の魅力化に取り組んでいます。教育の魅力化に当たっては、未来を切り開く力を持った奥出雲町の将来を担う子ども像を、幼稚園、小・中学校、高校、家庭、地域と共有し、学力の育成はもとより、ふるさと教育、キャリア教育等を通じ、奥出雲町らしい教育に取り組んでいくこととしています。

その取組の一つとして、幼・小・中・高が連携し、18歳でめざす子ども像についての検討を重ねています。

平成30年12月現在も検討中ですが、新指導要領に示された国の方針

- 確かな学力
- 健やかな体
- 豊かな心

はもとより、予測のつかない未来に向かい、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、グローバル化する社会に対応できる表現力等を備え、奥出雲で育ったことを誇りに、奥出雲への思いをもち続ける子などが話題に上っています。

こうした力をもった子どもを育てるためには、

- 一人ひとりを大切にする教育
- 一人ひとりの生きる力をはぐくむ教育

の推進が不可欠と考えます。

また、児童生徒の能力を伸ばしつつ、社会的自立の基礎、国家・社会の形成者としての基本的資質を養うためには、ある程度以上の、同年齢集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育むことが必要です。

3 再編による教育上の効果

(1) 国語、社会、算数、理科等で行われている「学年別指導(わたり)」による授業の解消など、子どもたちへの学習上の負担が軽減されます。

(2) 学級の人数が増えることにより、グループ学習や体育のボールゲーム、合奏、合唱活動など、学習経験の多様化が可能となります。

(3) 学校全体の児童数、教職員数が増加することにより、多様な考え方に触れる機

会が多くなります。また、学校生活、学校運営上の児童一人ひとりの負担が軽減されます。

(4) 1学年に複数の教員配置が可能となり、学年運営、教材研究等における教員の負担が軽減され、充実した学習指導が期待できます。

(5) 教育予算の集中化が可能となり、教育環境、教育設備の充実が期待できます。

4 再編にあたり配慮すべき事項

(1) 再編となる学校において、子どもたちは人間関係や学習環境が大きく変わるようになるため、事前の交流活動や再編後のきめ細かな指導が行えるよう配慮します。

(2) 地域と密接な関係の中で行われている特色ある教育活動を継承できるよう配慮します。

(3) 遠距離通学となる子どもたちの負担を考慮し、適切な通学支援策を検討します。

(4) 学校は地域コミュニティの中心的役割を長い間担ってきました。また、体育館は避難場所としての役割を持っています。再編後の施設・跡地の活用方法については、地域住民の皆さんと一緒に検討します。

VI 再編実施方針

1 再編の対象とする学校

奥出雲町学校再編基本計画検討委員会の答申、「児童が健やかに育まれる教育環境を維持するため、全校児童数15名以下の極小規模校は、早急に学校再編をする必要がある。また、複式学級のある小規模校についても、今後の児童数の減少や社会情勢の変化などにより、望ましい教育環境を確保するために、学校の再編をする必要がある。」および保護者アンケートの結果に基づき、2019年から2028年の児童数を見据えた上で、複式学級が見込まれる小学校を対象とします。これらの小学校は、今後の児童数の減少により、単に複式学級ということだけでなく、一人だけの学年、また、同性が一人しかいない学年が出てくる可能性があります。

今後の児童数に見込みにおいて、三成小、横田小以外の8校において上記の状態が見込まれており、本実施方針においては、町全体での通学時間や学校位置、歴史的背景、適正規模校を考慮に入れ、奥出雲町内のすべての小学校を対象とします。

2 再編の具体的方針

各小学校の今後の児童数見込み、再編後の児童数見込みを考慮し、全町で2つの小学校に再編することとします。

地理的・歴史的要件、通学時間について「おおむね1時間以内」を考慮し、仁多・中学校区小学校1校、横田中学校区小学校1校での再編とします。

再編後の学校位置については、仁多、横田それぞれの中学校校区の中心に位置し、規模的にも大きい三成小学校、横田小学校の場所とします。なお、三成小学校については、2021年竣工予定の三成小学校新校舎（仁多中学校隣接地）を想定しています。

再編後の学校については、地元説明、協議や再編準備に必要な期間をとるため、3年後の2022年4月の開校とします。

3 具体的方針により再編した場合の児童数推計

再編の具体的方針により、2小学校（仁多中学校校区1、横田中学校校区1）に再編した場合の児童数の推計は以下の通りです。

仁多中学校区小学校

仁多中学校区小学校		2022			2023			2024			2025			2026			2027			2028		
		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級	
1年	男	29	44	2	18	35	2	23	43	2	41	41	2	38	38	2	36	36	2	33	33	2
	女	15			17			20														
2年	男	22	50	2	29	44	2	18	35	2	23	43	2	41	41	2	38	38	2	36	36	2
	女	28			15			17														
3年	男	29	46	2	22	50	2	29	44	2	18	35	1	23	43	2	41	41	2	38	38	2
	女	17			28			15			17											
4年	男	23	44	2	29	46	2	22	50	2	29	44	2	18	35	1	23	43	2	41	41	2
	女	21			17			28			15			17								
5年	男	21	48	2	23	44	2	29	46	2	22	50	2	29	44	2	18	35	1	23	43	2
	女	27			21			17			28			15			17					
6年	男	20	48	2	21	48	2	23	44	2	29	46	2	22	50	2	29	44	2	18	35	1
	女	28			27			21			17			28			15			17		
児童数		280	12		267	12		262	12		259	11		251	11		237	11		226	11	

横田中学校区小学校

横田中学校区小学校		2022			2023			2024			2025			2026			2027			2028		
		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級		児童数	学級	
1年	男	13	24	1	14	37	2	9	18	1	26	26	1	25	25	1	24	24	1	23	23	1
	女	11			23			9														
2年	男	20	32	2	13	24	1	14	37	2	9	18	1	26	26	1	25	25	1	24	24	1
	女	12			11			23			9											
3年	男	18	33	1	20	32	1	13	24	1	14	37	2	9	18	1	26	26	1	25	25	1
	女	15			12			11			23			9								
4年	男	23	35	1	18	33	1	20	32	1	13	24	1	14	37	2	9	18	1	26	26	1
	女	12			15			12			11			23			9					
5年	男	18	34	1	23	35	1	18	33	1	20	32	1	13	24	1	14	37	2	9	18	1
	女	16			12			15			12			11			23			9		
6年	男	15	33	1	18	34	1	23	35	1	18	33	1	20	32	1	13	24	1	14	37	2
	女	18			16			12			15			12			11			23		
児童数		191	7		195	7		179	7		170	7		162	7		154	7		153	7	

※2018. 4. 1現在データによる数値です。

※特別支援学級在籍状況は未定のため、通常学級在籍として算定しています。

4 学校再編についての基本的手順

(1) 地区別協議会、再編準備委員会の設置

学校は、地域の活動にとってきわめて大きな影響をもっています。また、学校再編は、各学校が旧村による設立であったことから、地域にとって大変重要な問題であると考えます。

これらのことを配慮し、対象校の保護者や就学前の子どもの保護者、地域住民、学校関係者等の参加のもとで、説明会を実施するとともに、地区別協議会において、十分に議論・協議を行います。

再編方針に対する意向の把握をするため、地区別協議会において、保護者や地域の皆さまからご意見をいただき、集約をしながらとりまとめをしていきます。

その後、方向性が定まった場合、発展的に関係者による再編準備委員会に移行し、学校再編に向けた具体的な協議・準備を行います。

(2) 保護者の意向尊重について

学校が地域のコミュニティの核としての役割を果たしていることは、十分考慮したうえで、地区別協議会においては、学校教育の直接の受益者である児童の保護者及び将来の受益者である就学前の子どもの保護者の意向については、特に配慮します。

少子化の状況によっては、再編・統合にかかわらず学校教育以外の場で社会性を育む取り組み、1人学級、あるいは男子1名、女子1名の学級における課題については、家庭の理解・協力なくして十分な教育的効果を上げることが難しいためです。

(3) 再編に向けてのスケジュール

2019年度（計画1年次）

再編についての各校区での保護者、住民説明会
地区別協議会の設置
地区別協議会での議論、協議

2020年度（計画2年次）

地区別協議会での議論、協議
2020年7月 再編への結論締め切り
※再編賛成の場合

再編準備委員会での協議
具体的な再編に向けての具体的協議

2021年度（計画3年次）

再編準備委員会での協議
統合後の単式学級に向け、複式の教育課程解消などへの教職員配置
スムーズな移行に向け、学校間の協議
再編後の校舎、備品等の扱いについての協議

2022年4月 再編後の学校の開校

※高尾小学校については、三成小学校の改築に合わせ、2021年3月閉校、4月三

成小学校との再編を地元の保護者、地域の皆さまに説明しており、協議を進めていきます。

(4) 再編校の名称、校章、制服、体操服等について
別途協議します。

5 現在の小学校における今後の児童数及び学級編成の見込み等

町内各小学校の状況について、使用している数値については以下によります。

※2019年度以降の1年生はH30.4.1現在の住基データによる数値です。

※2025年度以降は「H30教職員定数算定資料」による数値です。このため、学級編成等も見込み数になります。見込み数については、斜体で表示しています。

※社会動態、自然減、区域外就学は考慮していません。(以降すべて同様です)

(1) 布勢小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

布勢小	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	4	7	3	6	1	5	7	7	7
	女	4	3	6	2	4	3	7	7	6
2年	男	4	4	7	3	6	1	7	7	7
	女	10	4	3	6	2	4	7	7	7
3年	男	4	4	4	7	3	6	5	7	7
	女	3	10	4	3	6	2	4	13	15
4年	男	7	4	4	4	7	3	6	5	7
	女	4	3	10	4	3	6	2	3	7
5年	男	6	7	4	4	4	7	3	6	5
	女	4	4	3	10	4	3	6	2	3
6年	男	4	6	7	4	4	7	3	6	1
	女	4	4	4	3	10	3	6	2	4
児童数	58	60	59	56	54	48	47	44	42	40
学級数	6	6	6	6	6	6	5	5	4	4

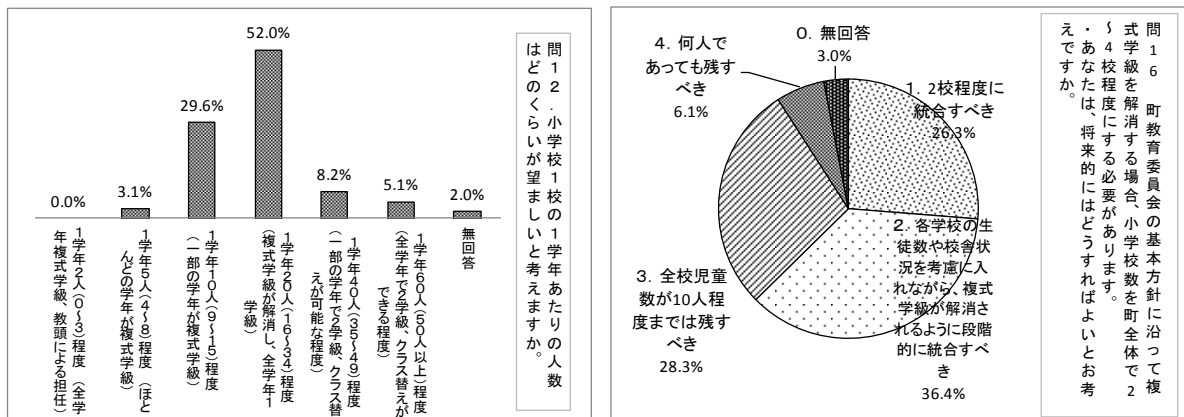
イ 学級編成、学校運営上の課題

布勢小学校の場合、2024年度までは、現在の単式6学級規模を維持するものの、2025年度の中学年以降徐々に複式学級が増加するものと考えられます。

また、2023年度の入学生は男子が1名であり、単式学級であることから、同学年の中での遊びなどに課題が生ずる可能性があります。また、9名の2021年度入学生、8名の2022年度の入学生は、2025年度以降、学年度により単複を繰り返すこととなります。このため、年度により教員数の増減があり、教員配置等の学校運営上の課題が発生します。

なお、2027年度以降は、更なる児童数の減少により、中・高学年の複式学級は恒常化するものと考えられます。

布勢 小学校区保護者のアンケート結果



(2) 三成小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

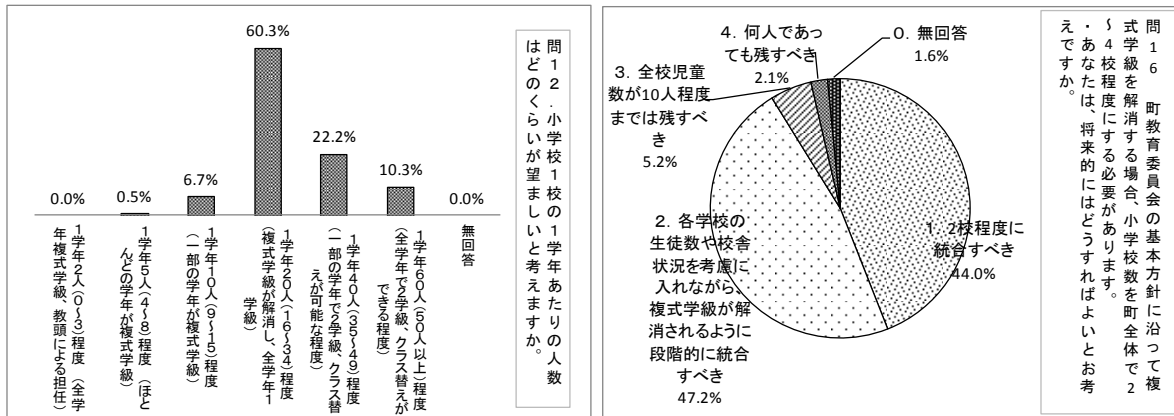
三成小	2019		2020		2021		2022		2023		2024		2025		2026		2027		2028		
1年	男	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19	9	17	16	16	15	15	14	14	13	13
	女	7		8		6		8		7		8									
2年	男	5	8	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19	9	17	16	16	15	15	14	14
	女	3		7		8		6		8											
3年	男	6	20	5	8	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19	9	17	16	16	15	15
	女	14		3		7		8		6		8									
4年	男	10	15	6	20	5	8	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19	9	17	16	16
	女	5		14		3		7		8											
5年	男	10	19	10	15	6	20	5	8	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19	9	17
	女	9		5		14		3		7		8									
6年	男	7	16	10	19	10	15	6	20	5	8	10	17	7	15	8	14	11	19	12	19
	女	9		9		5		14		3		7		8							
児童数	95		94		89		93		92		101		100		100		100		94		
学級数	6		6		6		6		6		6		6		6		6		6		

イ 学級編成、学校運営上の課題

今後10年間は、通常学級が単式6学級の、現状の学校規模を維持するものと考えます。

現在の校舎については、老朽化が進むとともに、特別支援学級、通級指導教室等の増設により、管理運営上の課題はありますが、2021年度春竣工予定の新校舎により対応できるものと考えます。

三成 小学校区保護者のアンケート結果



(3) 高尾小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

高尾小	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	女	0	1	1	1	0	0	0	0	0
2年	男	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	女	1	0	1	1	1	0	0	0	0
3年	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	女	0	1	0	1	1	0	0	0	0
4年	男	1	1	0	1	0	0	0	0	0
	女	1	0	1	0	1	1	0	0	0
5年	男	1	1	1	0	1	0	0	0	0
	女	0	1	0	1	0	1	1	0	0
6年	男	1	1	1	1	0	1	0	0	0
	女	2	0	1	0	1	0	1	1	0
児童数	9	7	7	6	5	4	3	2	1	0
学級数	3	3	3	3	3	3	2	1	1	0

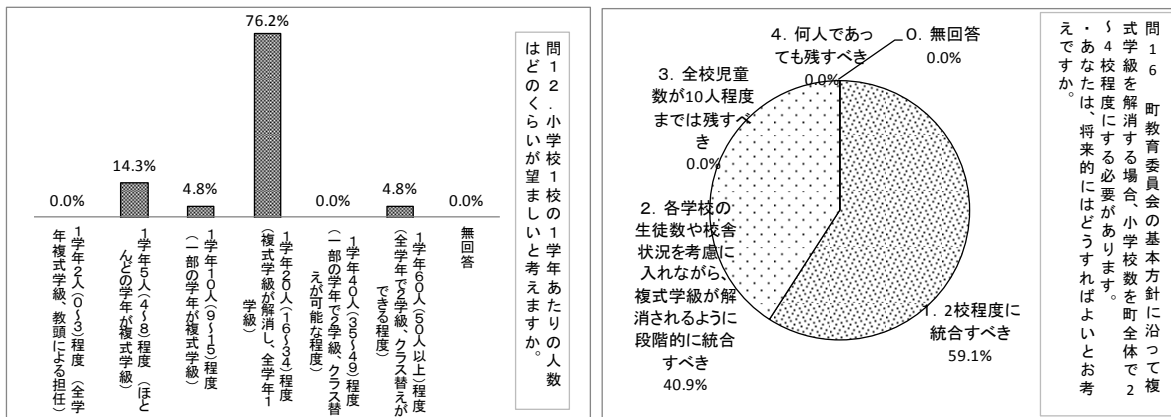
イ 学級編成、学校運営上の課題

2019年度以降、出生数からの予測では、更なる児童数の減少が予想されます。また、1人学年及び複式学級であっても児童数2名の学級となるなど、子どもたちが多様な考え方に触れる等の社会性を培う学習、ゲーム運動などの集団学習、不特定を相手にしたコミュニケーション能力の育成等に支障をきたすことが予想されます。

2024年度以降は、学級数の減少に伴い教員定数も減少し、学校施設管理、学校運営上様々な問題が発生するものと思われます。

このため、三成小学校新築校舎の竣工に伴い、三成小学校との再編に向けて、協議を進めています。

高尾 小学校区保護者のアンケート結果



(4) 亀嵩小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

亀嵩小		2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	4	6	5	3	1	4	6	5	5	5
	女	5	0	7	6	0	2				
2年	男	2	4	6	5	7	1	4	6	5	5
	女	2	5	0	7						
3年	男	2	2	4	6	12	3	1	4	6	5
	女	4	2	5	0						
4年	男	2	2	2	4	6	5	3	1	4	11
	女	3	4	2	5						
5年	男	3	2	2	2	13	6	5	3	1	4
	女	2	3	4	2						
6年	男	0	3	2	2	13	4	6	5	3	7
	女	7	2	3	4						
児童数		36	35	42	43	38	40	37	36	29	28
学級数		4	4	4	4	4	4	5	5	4	4

イ 学級編成、学校運営上の課題

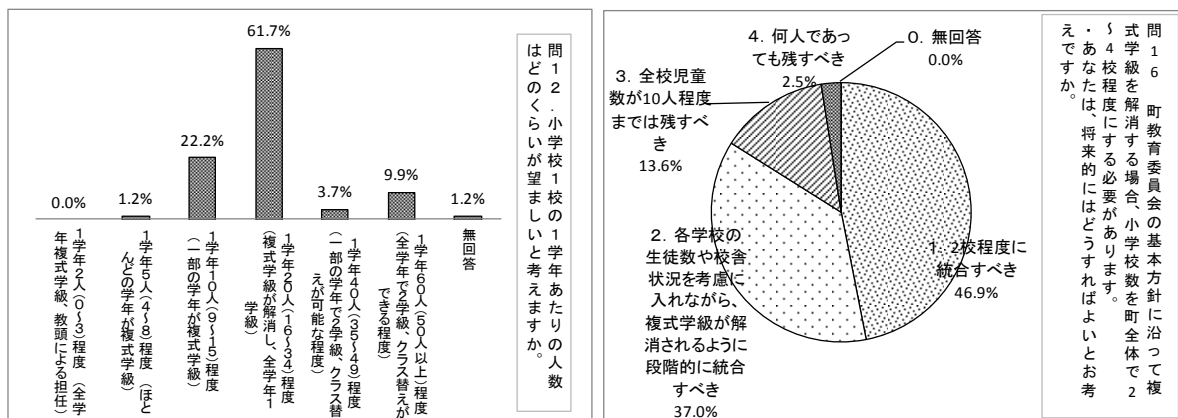
2020年度の入学児童は、男子のみ6名、2023年度の入学生は、男子1名のため、友人関係等の社会性を培う上での課題が予想されます。また、2020年度の男子6名については、男女共学の学習活動を通して「多様性」を尊重し「協働性」を身に付けるという学習の機会が制限されます。

また、2023年度の男子1名の入学生は、学年別指導（わたり）の授業を1人で受けることになり、多様な意見との接触、複数を相手としたコミュニケーション能力の発達に支障が生ずる可能性もあります。

2025年以降、学年、男女による不均衡や更なる児童数の減少が予想されるため、上記の課題が継続するものと思われます。

なお、2023年度から低学年が8名以下になる学年度は、学級数の減少に伴い教員の定数も減少し、学校運営上の課題も大きくなります。

亀嵩 小学校区保護者のアンケート結果



(5) 阿井小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

阿井小	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	3	8	5	8	2	5	9	8	8
	女	2	4	3	1	4	5	9	8	7
2年	男	6	3	8	5	8	2	5	9	8
	女	8	2	4	3	1	4	5	9	8
3年	男	6	6	3	8	5	8	2	5	9
	女	5	8	2	4	3	1	4	5	8
4年	男	1	6	6	3	8	5	8	2	5
	女	7	5	8	2	4	3	1	4	9
5年	男	5	1	6	6	3	8	5	8	2
	女	9	7	5	8	2	4	3	1	4
6年	男	5	5	1	6	6	3	5	8	2
	女	6	9	7	5	8	2	4	1	4
児童数	63	64	58	59	54	50	54	50	50	48
学級数	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5

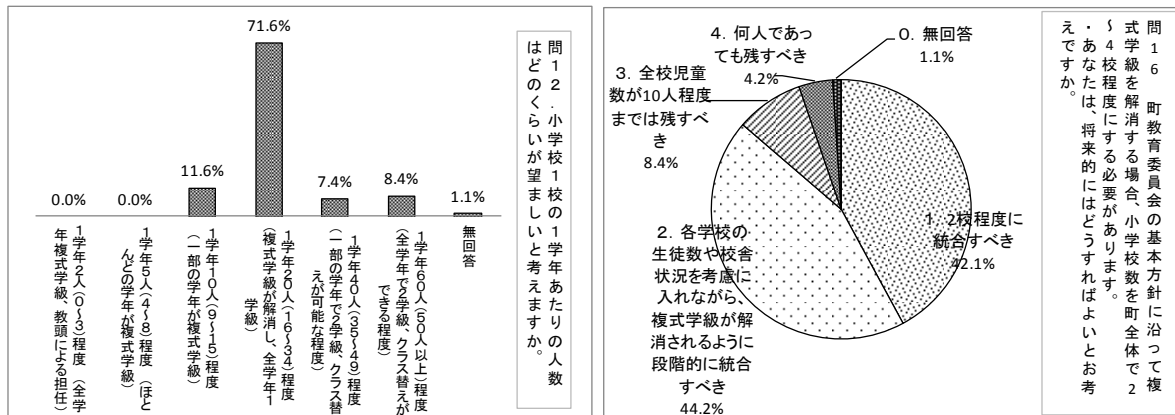
イ 学級編成、学校運営上の課題

2022年度の入学生については、女子が1名であり、この学年については、6学年間女子1名の学級が編成されるため、良好な友人関係、多様な価値観の育成などに支障が生ずる可能性があります。

また、2025年度から中学年が複式学級となります。本指針では、2025年度以降の入学者数を9名から徐々に減少するものとの見込みを示していますが、2019年度5名、2023年度6名のように、年度による増減を伴いながら、少子化は進行するものと考えられます。

このため、2025年度以降、実際には複式学級の増加、単複の繰り返しによる学級数の増減に伴う教員数の増減、男女数の不均衡など教育上の課題を含め複数の学校運営上の課題が生ずる可能性があります。

阿井 小学校区保護者のアンケート結果



(6) 三沢小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

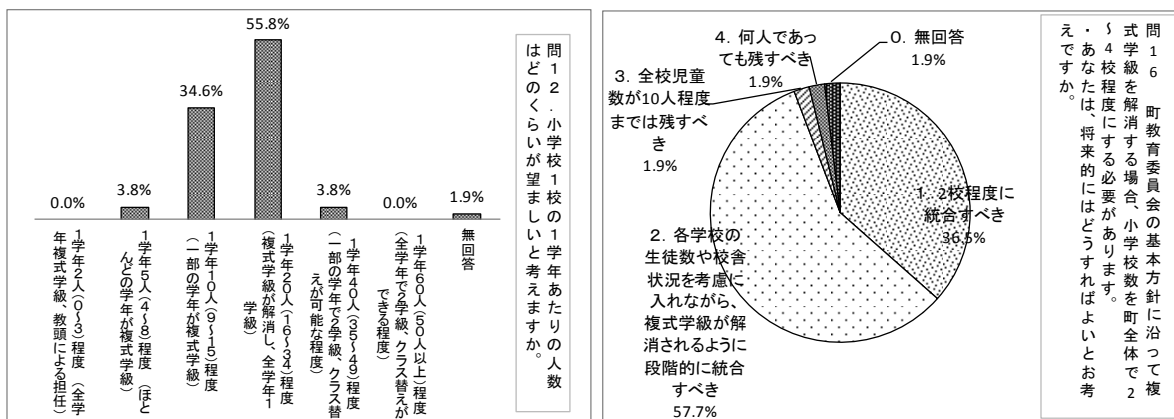
三沢小		2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	1	1	1	1	2	0	3	3	2	2
	女	3	1	5	0	2	2	5	6	5	4
2年	男	4	1	1	1	1	2	0	3	3	2
	女	3	3	1	5	0	2	2	3	3	2
3年	男	1	4	1	1	1	1	2	0	3	3
	女	2	3	3	1	5	0	2	2	5	6
4年	男	0	1	4	1	1	1	1	2	0	3
	女	1	2	3	3	1	5	0	2	2	3
5年	男	3	0	1	4	1	1	1	1	2	0
	女	2	1	2	3	3	1	5	0	2	2
6年	男	1	3	0	1	4	1	1	1	1	2
	女	0	2	1	2	3	3	1	5	0	2
児童数		21	22	23	23	24	19	18	19	15	16
学級数		4	3	3	3	3	3	3	3	3	3

イ 学級編成、学校運営上の課題

現在、男女いずれかが1名の学年が生じています。こうした学年については、男女共学による友人関係、多様な価値観の育成等、教育上の支障が懸念されます。2020の入学生は、前述の要件（児童数と学級編成及び学習指導についての補足説明 P11）により、入学年度は、国語、社会、算数、理科等に関し、「学年別指導（わたり）」を受けることとなりますが、翌年度からは、わたりの授業もまじえ、A・B年度の内容についての授業を受けることになると思われます。

また、2025年以降の入学予測を3名、2027年以降を2名としていますが、学年、男女による不均衡や更なる児童数の減少もあり得ます。こうした状況の中で、子どもたちが多様な考え方に触れるなどの社会性を培う学習、ゲーム運動や合奏・合唱などの集団学習、また、単複を繰り返すことによる学校運営上に支障をきたすことが予想されます。

三沢 小学校区保護者のアンケート結果



(7) 鳥上小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

鳥上小		2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	0	3	1	1	1	2	2	2	2	2
	女	1	1	1	0	2	0	2	2	2	2
		8	5	6	3	4	5	4	4	4	4
2年	男	5	0	3	1	1	1	2	2	2	2
	女	2	1	1	1	0	2	0	2	2	2
		5	9	8	5	6	3	4	5	4	4
3年	男	2	5	0	3	1	1	1	2	2	2
	女	0	2	1	1	1	0	2	0	2	2
		5	9	8	5	6	3	4	5	4	4
4年	男	1	2	5	0	3	1	1	1	2	2
	女	2	0	2	1	1	1	0	2	0	2
		11	10	5	9	8	5	6	3	4	5
5年	男	2	1	2	5	0	3	1	1	1	2
	女	5	2	0	2	1	1	1	0	2	0
		11	10	5	9	8	5	6	3	4	5
6年	男	2	2	1	2	5	0	3	1	1	1
	女	2	5	2	0	2	1	1	1	0	2
		24	24	19	17	18	13	14	12	12	13
児童数		24	24	19	17	18	13	14	12	12	13
学級数		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

イ 学級編成、学校運営上の課題

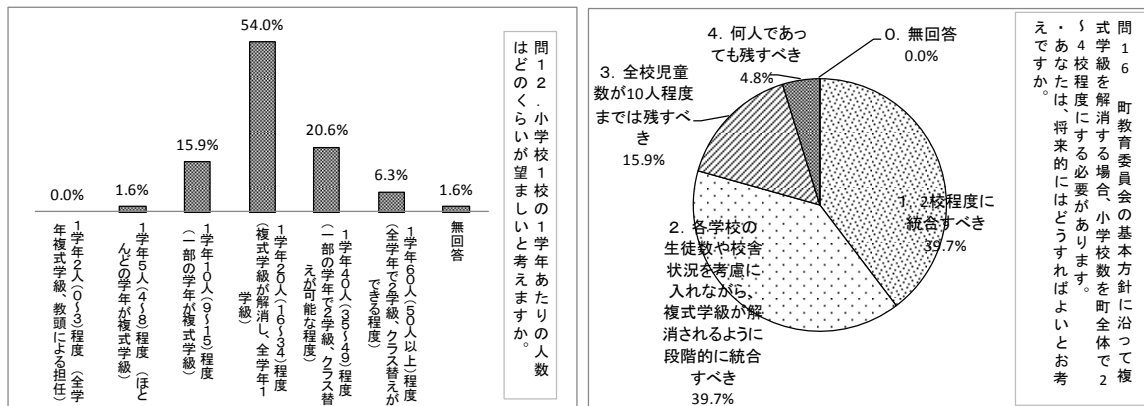
2019年度の入学児童は女子1名ですが、複式学級のため、2年生との学習においては、同性の友人をつくるのが可能です。ただし、わたりの授業が行われるであろう算数については、1人あるいは、担任との1対1の学習場面が生ずるため、多様な考え方に触れる機会は限られたものとなることも考えられます。

2025年以降の入学予測は2名としていますが、更なる児童数の減少もあり得ます。

こうした状況の中で、子どもたちが多様な考え方に触れるなどの社会性を培う学習、ゲーム運動や合奏、合唱などの集団学習、不特定を相手にしたコミュニケーション能力の育成等に支障をきたすことが予想されます。

さらに2024年度以降は児童数15名以下が予想されるため、教頭担任、養護教諭、事務職員など更なる教員数の減少が発生するものと思われます。

鳥上 小学校区保護者のアンケート結果



(8) 横田小学校

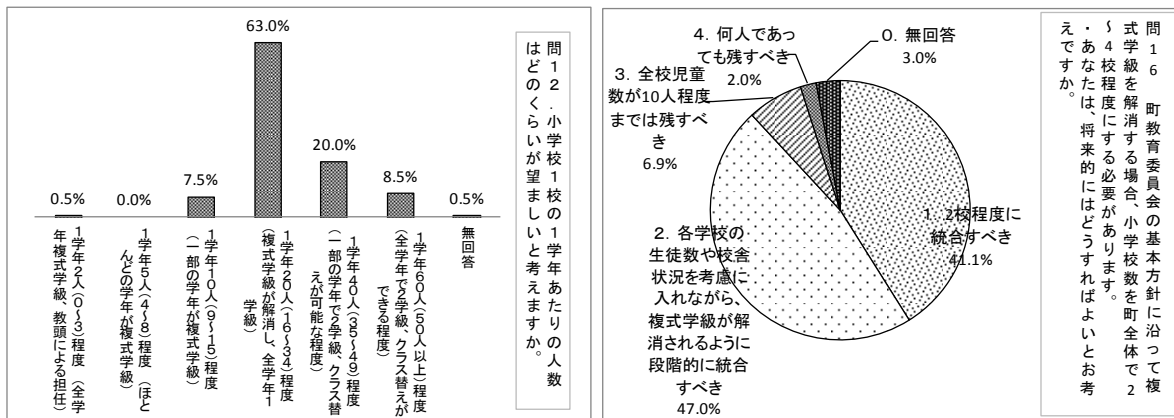
ア 今後の児童数及び学級編成予定

		2019		2020		2021		2022		2023		2024		2025		2026		2027		2028	
1年	男	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20	4	10	14	14	13	13	12	12	12	12
	女	8		8		5		6		14		6									
2年	男	5	12	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20	4	10	14	14	13	13	12	12
	女	7		8		8		5		6		6									
3年	男	2	10	5	12	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20	4	10	14	14	13	13
	女	8		7		8		8		5		6		14		6					
4年	男	11	24	2	10	5	12	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20	4	10	14	14
	女	13		8		7		8		8		5		6		14		6			
5年	男	9	14	11	24	2	10	5	12	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20	4	10
	女	5		13		8		7		8		8		5		6		14		6	
6年	男	13	26	9	14	11	24	2	10	5	12	7	15	7	15	13	18	5	11	6	20
	女	13		5		13		8		7		8		8		5		6		14	
児童数		101		90		94		81		91		89		88		86		80		81	
学級数		6		6		6		6		6		6		6		6		6		6	

イ 学級編成、学校運営上の課題

2025年度以降、15名の入学生から、徐々に減少していく可能性はあります。今後10年間は、2割程度児童数が減少する見込みですが、現状の通常学級単式6学級の学校規模を維持できるものと考えます。

横田 小学校区保護者のアンケート結果



(9) 八川小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

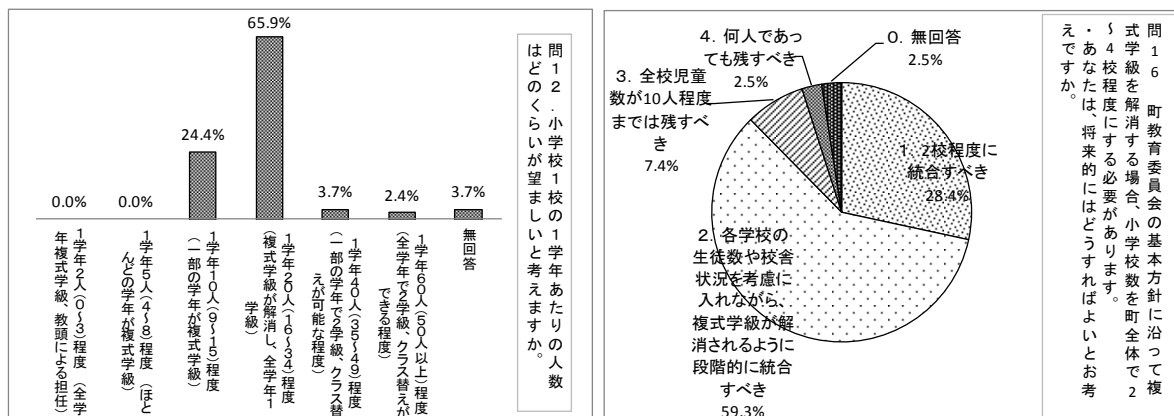
八川小	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	9	5	3	4	2	8	5	5	5
	女	1	5	4	1	3				
2年	男	6	9	5	3	4	1	5	5	5
	女	5	1	5	4	1				
3年	男	5	6	9	5	3	2	1	5	5
	女	2	5	1	5	4				
4年	男	3	5	6	9	5	4	3	1	10
	女	4	2	5	1	5				
5年	男	5	3	5	6	9	3	4	2	1
	女	5	4	2	5	1				
6年	男	4	5	3	5	6	5	3	4	10
	女	1	5	4	2	7				
児童数	50	55	52	50	48	40	35	30	28	28
学級数	4	6	5	6	6	4	4	4	4	4

イ 学級編成、学校運営上の課題

現在および今後において、女子が1名のみの学年があり、年度によって男女間の不均衡が生じます。このため、多様な価値観の育成、望ましい人間関係の醸成などに課題が生ずる可能性があります。

また、2025年度の以降の入学予測を5名としていますが、今後の出生状況によっては更なる児童数の減少も考えられます。その場合には、2024年度同様1年生を含む学級が8名以下となり低学年も複式学級となるため、更なる学級数の減少が予想され、教員数の減少による学校運営上の課題が発生する可能性があります。

八川 小学校区保護者のアンケート結果



(10) 馬木小学校

ア 今後の児童数及び学級編成予定

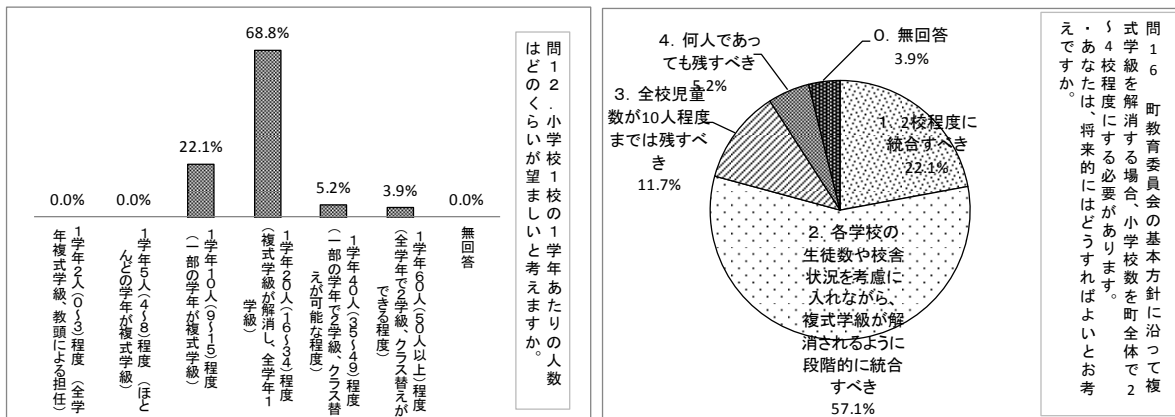
馬木小		2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
1年	男	7	3	3	3	5	2	5	5	5	4
	女	9	4	5	7	9	3				
2年	男	2	7	3	3	3	5	8	5	5	5
	女	4	9	4	5	7	9				
3年	男	6	2	7	3	3	3	16	2	5	5
	女	14	4	13	13	9	12				
4年	男	5	6	2	7	3	3	9	5	2	5
	女	8	14	2	2	1	2				
5年	男	4	5	6	2	7	3	13	3	5	2
	女	9	8	14	4	2	2				
6年	男	6	4	5	6	2	7	13	3	3	5
	女	10	9	8	14	2	2				
児童数		54	48	44	43	38	37	33	34	34	31
学級数		6	6	5	5	4	4	3	4	4	4

イ 学級編成、学校運営上の課題

2020年度の入学児童のうち、女子は1名、同じく2024年度の入学児童のうち、女子は1名で、年度によって男女間の不均衡が生じます。このため、友人関係の構築を含め、望ましい人間関係の醸成、多様な価値観の育成などに課題が生ずる可能性があります。また、2021年度からは中学年が、2023年度からは高学年も複式学級となっていくことが考えられます。

また、2025年度の以降の入学予測を5名としていますが、今後の出生状況により、低学年も8名を下回る場合には、全学年が複式学級となる可能性があります。

馬木 小学校区保護者のアンケート結果



Ⅶ 中学校について

1 各中学校の生徒数・学級数の推計

(1) 仁多中学校

仁多中		2019		2020		2021		2022		2023		2024		2025		2026		2027		2028	
1年	男	17	2	18	2	28	2	21	2	20	2	21	2	23	2	29	2	22	2	29	2
	女	21		28		26		21		28		27		21		17		28		15	
2年	男	23	2	17	2	18	2	28	2	21	2	20	2	21	2	23	2	29	2	22	2
	女	30		21		28		26		21		28		27		21		17		28	
3年	男	27	2	23	2	17	2	18	2	28	2	21	2	20	2	21	2	23	2	29	2
	女	23		30		21		28		26		21		28		27		21		17	
合計	男	67	6	58	6	63	6	67	6	69	6	62	6	64	6	73	6	74	6	80	6
	女	74		79		75		75		75		76		76		65		66		60	
		141		137		138		142		144		138		140		138		140		140	

※2019年度以降の1年生は、校区の小学校の卒業生をもとにした数値です。

※太字は学級数の見込みです。

※社会動態、自然減、区域外通学は考慮していません。

(これは横田中学校在籍予測についても同様です)

部活動	陸上	バレー部	ソフト テニス	剣道	ホッケー	吹奏楽	園芸
男子	○	○	○	○	○	○	○
女子		○			○		

(2) 横田中学校

横田中		2019		2020		2021		2022		2023		2024		2025		2026		2027		2028	
1年	男	25	2	25	2	20	2	20	2	15	1	18	1	23	1	18	1	20	1	13	1
	女	29		20		20		22		18		16		12		15		12		11	
2年	男	19	2	25	2	25	2	20	2	20	2	15	1	18	1	23	1	18	1	20	1
	女	16		29		20		20		22		18		16		12		15		12	
3年	男	23	2	19	2	25	2	25	2	20	2	20	2	15	1	18	1	23	1	18	1
	女	29		16		29		20		20		22		18		16		12		15	
合計	男	67	6	69	6	70	6	65	6	55	5	53	4	56	3	59	3	61	3	51	3
	女	74		65		69		62		60		56		46		43		39		38	
		141		144		139		127		115		109		102		102		100		89	

部活動	陸上	バレー部	ソフト テニス	剣道	ホッケー	吹奏楽	園芸
男子	○		○	○	○	○	○
女子		○			○		

2 中学校の再編について

現在の出生数から推測すると、仁多中学校については、今後10年間は、現在の学校規模が維持されるものと思われませんが、2029年度以降は、1学年1クラス化や急激な生徒数の減少が予想されます。

横田中学校については、仁多中学校よりも早いスピードで生徒数の減少がみられるようになります。2023年度から、1学級の学年が発生し、2025年度以降は各学年1クラスの全3クラスの学校規模となり、2030年度以降は、生徒数の減少がさらに顕著になるものと思われま

す。小学校に比べ、中学校はより専門的な知識、免許を持つ教員の確保が必要です。また、学校生活における部活動の占める割合も大きく、部活動指導の専門性も求められています。全体の学級数減により、教員数は減ることになり、教科別教員や部活動の専門性を持った教員をバランス良く確保していくことが難しくなってきます。

また、生徒数の減少や男女の人数比の不均衡により、部活動数の減は避けられず、さらに、1学年1学級となった場合は、小学校中学校においてクラス替えがなく、9年間同じメンバーで過ごすこととなります。

教育課程、部活動の数、内容等については、基本的に学校判断によるものです。しかし、児童・生徒数の減少は、町全体の問題です。

中学校の再編については2009年の学校再編基本計画では対象としていませんでしたが、生徒数のさらなる減少に伴う諸課題および校舎の耐久年数の課題があり、小学校再編の方向性が固まりしだい、横田中学校が全クラス1クラスとなる2025年度を見据え、計画的に検討するものとし